



「宇多院物名歌合」について：
「本院左大臣家歌合」「近江御息所歌合」にふれつ
つ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中島, 和歌子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007199

「宇多院物名歌合」について

—「本院左大臣家歌合」「近江御息所歌合」にふれつつ—

中 島 和 歌 子

一、はじめに

初期歌合の一つ「宇多院歌合」は、十二題二十四首すべてが物名歌であり、萩谷朴氏の『平安朝歌合大成』（以下『歌合大成』と略す）巻一・一五では「宇多院物名歌合」と呼ばれている。その技巧が当時の最高水準にあることは、早くから指摘されてきた⁽¹⁾。

しかし、本歌合の意義は、物名歌であること以外にも見出すことができる。例えば、庭の草木やその花をよんだ前栽合のうち、秋季の「本院左大臣家歌合」や、春季の「近江御息所歌合」の成立・特徴・意義などを考える上でも、看過できない存在なのである⁽²⁾。

「本院左大臣家歌合」は、「本院左大臣」藤原時平が延喜五年（九〇五）以降同八年以前の秋に開催した十二題二十首の歌合で、「近江御息所歌合」は、醍醐天皇との間に夭折を含めると少なくとも八人もの子を儲け、崩御後に息子源高明の官名近

江権守に因んで「近江更衣」と呼ばれた源周子が、延喜十四年以降延長八年（九三〇）以前の三月中下旬に開催した、二十題二十首の歌合である。前者の歌人としては紀貫之（左方）、後者は凡河内躬恒が確実であるが、歌のよみ方などから、二人は両方の歌合に参加したと考えられる。

「近江御息所歌合」については、既に萩谷氏が物名歌合を継承するものとして「源順馬名歌合」などと共に挙げられているが、本歌合との関係は、それだけではない。本稿では、この「宇多院歌合」の物名歌以外の特徴を探り、右の両歌合との関係にもふれながら、初期歌合の多様性の一端を明らかにしたい。

二、本文

『十卷本類聚歌合』巻一（尊経閣文庫蔵）を底本とする『新編国歌大観』（片桐洋一氏・中周子氏による）の表記をルビに残し、独自に漢字を当て、題が隠されている箇所には傍線を付した。但し、踊り字は『歌合大成』通りに残した。

歌番号は両テキストで共通するが、翻刻がやや異なる。『歌合大成』が、13・14題「欵〔欵〕冬花」、15「しのばなむ〔ん〕」「わがみ〔身〕」、17・18題「鴈〔雁〕靡花」、24「み〔見〕る」としているのは（「」内が『新編国歌大観』）、文字の扱い方の違いにすぎない。しかし、20「しつ〔へ〕」は別である。底本は未見だが、その転写本である書陵本を見ると、明らかに「しつ」となっている⁽³⁾。本来は「しへ〔薬〕」であつて、「しめ〔標〕」も掛けていると考えられるが⁽⁴⁾、字体の類似から誤写されていたのだろう。

また、22の初句のみ、『十卷本』の「あまつそら」を『二十卷本』の「あまのかは」に改めた⁽⁵⁾。題に影響しない箇所であるし、「ふち」や「と」との縁語関係から⁽⁶⁾、「かは」が本来の形であつたと考えられるのである。底本の改訂のあり方や、両本の異同等については、『歌合大成』を参照されたい。

物名歌ゆえに、確かにやや無理な表現はある。例えば、「欵冬花」を隠した13「花折らで我ぞや止まふ木葉なる露を玉にて消たじと思へば」（花を折らないで私は止もうか。木の葉に降りた露を玉のまま消さないでおこうと思うから）は、「止まふ」を「止まむ（ん）」に、14「いづことも分かず春雨降り止まふ木の葉なべても萌えにけるかな」（どことも区別しないで春雨が降り止まないことだ。それによって、木の葉がまんべんなく萌え出したのだったよ）は、「止まぬ（ず）」に通用させている⁽⁷⁾。しかし、殆どすべての歌の意味を解することが可能である。

宇多院歌合

子日 左

1 ほのぼのと峰の日のまづ射しつれば結ばぬ春の雪ぞ解けける

右勝 友則

2 片恋を駿河の富士の山よりも胸の火の先づ燃え増さるかな

春花 左持 貫之

3 年変はる野はなほ異に成りぬらし鹿の子斑に雪も消にけり

右 忠岑

4 白雪の消えて緑に変はる野は流れて色の移らざらなむ

梅花 左勝 貫之

5 退き遠く更には出でて潜きてむ海布の葉靡きて打ち寄せよ波

右 定文

6 風吹かばいざ浦ごとに出でて見む海布の葉靡きて波に寄るやと

紅梅花 左 貫之

7 会ひ難き人をば更に見し頃は寝の離れては寝られざりけり

右勝

8 忘れにし人をぞ夢になほ来むは寝の華やかに寝られてぞ見る

桜花 左持 興風

9 我が園へいざ帰りなむ朝顔の 一花咲くら野は成りにけり

右

10 春は来ぬ種に蒔くべき稲はなさ蔵の端辺に降ろし果ててよ

榊桜花

左

貫之

11 春霞立ち満つを見て俄かには桜の花と思ひけるかな

右勝

忠岑

12 遥かには桜の花と見ゆれども入りて覗きは広くぞありける

款冬花

左

定文

13 花折らで我ぞや止まふ木の葉なる露を玉にて消たじと思へば

右勝

14 いづことも分かず春雨降り止まふ木の葉なべても萌えにけるかな

躑躅花

左

定文

15 雁が音に思ひかけつつ悵はなん天つ空なる我が身なりとも

右

16 鶯の声懐かしく鳴きつるは後も恋ひつつ悵はなむとか

雁靡花

左持

貫之

17 片岡に火の花々に見えつるはこのもかのもに誰か点けつる

右

友則

18 わたつみの沖中に火の離れ出でて燃ゆと見ゆるは天つ星かも

石解花

左

貫之

19 春来ては昨日ばかりを浅緑なべて今朝濃く野は成りにけり

右

20 春雨に薬緩ぶらし春の草濃く野はなべて咲き満ちにけり

藤花

左勝

21 置く露の光りて玉ぞ見え紛ふ茅の葉ながらに消えずもあらなむ

右

深養父

22 天の川照りみ曇りみ行く月の淵の端門はさやけかるらむ

子日を惜しむ

左

貫之

23 胸の火を緒しも貫かねば乱れ落つる涙の玉にかつぞ消ちつる

右勝

忠岑

24 暗き夜に灯す螢の胸の火を緒しも解けたる玉かとぞ見る

三、歌人・成立

歌人は、『十卷本』によると次のようになる。当代を代表する歌人ばかりだが、特に左方の貫之は八首と最多である。不記が同一人物か否かは不明であるが、左右計六首は貫之に次ぐ数になる。「亭子院女郎花歌合」(二一・左・ほて・御製)や「亭子院歌合」(一一・左勝・御)には御製もあるので、これらの中に、主催者宇多法皇自身の歌があったと考えることもできるだろう。特に左方の21の可能性が高いか。また定文が左右両方

に見えるが、「亭子院歌合」などでも同様である。なお『二十卷本』では、9・22の作者が記されておらず、興風と深養父は参加しなかったことになる。

左方Ⅱ貫之(1・3・5・7・11・17・19・23)

平定文(13・15)

藤原興風(9)

不記(21)

右方Ⅱ不記(8・10・14・16・20)

壬生忠岑(4・12・24)

紀友則(2・18)

定文(6)

清原深養父(22)

他出は次の通り(本文と番号は『新編国歌大観』による、以下同様)。「歌合大成」で指摘された以外には未見である。作者名が右と異なる箇所傍線を付した。

2 『続後拾遺集』物名・五〇七・亭子院の歌合に、子日の

松・紀友則 四・五句「我が胸の火の先づも燃ゆるか」

2 『夫木抄』卷十九・雑部一・七九四八・寛平御時歌合、

子日・友則 四・五句「我が胸の火の先づ燃ゆるかな」

9 『夫木抄』卷四・春部四・一四一八・亭子院歌合、花桜・

興風 初句「和歌の浦へ」、五句「移ろひにけり」

17 『古今六帖』六・かにひ・三九一〇・不記 二句「火

の遙々に」、五句「誰か点けけん」

18 『拾遺集』物名・三五八・かにひの花・伊勢 初句「わ

たつ海の」、五句「海人の漁りか」

18 『拾遺抄』雑上・四八三・かにひの花・伊勢

18 『伊勢集』かにひの花 四・五句「燃ゆる見ゆるは

海人の漁りか」

18 『古今六帖』六・かにひ・三九〇九・不記 初句「わ

たつうみの」、五句「海人の漁火」

19 『古今六帖』六・さ・さ・三九一三・不記 初句「春

は来て」、四句「色は今朝濃く」

20 『古今六帖』六・さ・さ・三九一四・不記 二句「し

めぞ結ふらし」、三句「花に(よ)さ」

24 『古今六帖』六・ほたる・四〇二二・貫之 初句「夏

の夜は」、四・五句「緒しも絶えたる玉と見るかな」

24 『夫木抄』卷八・夏部二・三二六一・亭子院歌合、惜子

日・忠岑 四句「押し籠め持たる」

従来の研究では、成立時期の検証の為、特に18が注目されてきた。2・18の作者が友則とされることから、彼の没年以前つまり延喜五年(九〇五)以前の春の成立とする説(久曾神氏他)、本歌合から『古今集』物名の部に採られた歌が全く無いことや、18が他資料では伊勢の作とされていることから、友則作を疑問視し、『古今集』成立以後の延喜六年から延喜十三年三月の「亭子院歌合」の後までの春と考える説(萩谷氏他)、あるいは延喜七年頃の成立とする説(村瀬敏夫氏『紀貫之伝の研究』桜楓社、昭56)が出されていた。

これに対して遠藤寿一氏は、宇多法皇の寵臣躬恒が不参で

あつたのは延喜十一年正月の和泉権掾任官による赴任の為、また逆に法皇と疎遠であつた貫之が活躍しているのは、藤原定方の推薦による延喜十三年三月十三日の「亭子院歌合」への出詠や、その後の『古今集』補訂責任者といつた宇多法皇との関係が少し密になつてきた時期ゆえと考え、更に『十卷本歌合巻総目録』巻一の配列などから、「亭子院歌合」以後、躬恒の和泉権掾の任期が終る同十五年以前の春の子日頃、つまり、延喜十四年正月あるいは同十五年正月の子日か子日後間もなくの開催と推定された⁽⁹⁾。

従うべき見解であると思われる。更に、9に野や園に咲く「朝顔」がよまれていることも、『古今集』成立以後と考えられる理由の一つとできようか。『古今集』の成立当時はまだ、薬用として輸入された「牽牛子^{けいこし}」が、『本草和名』や『倭名類聚抄』に見える「朝顔」という和名を獲得していなかつた⁽¹⁰⁾。

四、判・歌題・構成

『二十卷本』は、作者名のみならず、判が『十卷本』よりも少なく、十二番中四番にしか無い。徳原茂実氏が現存最古の歌合「民部卿家歌合」について示された方法で⁽¹¹⁾、奇数番号(左)の勝ちを○、負けを×、持を△、判が加えられていない番いを空白として示すと、次のようになる。

歌番号	1	3	5	7	9	11	13	15	17	19	21	23
『十卷本』	×	△	○	×	△	×	×	△	○	×		
『二十卷本』	×			×	△						○	

徳原氏は、「民部卿家歌合」の「前半の六番については、両本に記された判は全く一致しているのに、後半の六番には一致するものはない」ことや、「あたかも後世の連歌のように歌を合わせつつ展開するというこの歌合の性格」から、「この歌合には本来判が加えられなかつたのではないか」と推測された。両本の異なるあり方は異なるが、本歌合の場合も、その可能性があるのではないか。元から判があつたのなら、『二十卷本』が六箇所も少ないのは不自然である(同本10の「右」の下に「持」とあるのも不審)。

更に、「一番」以下の番数は『二十卷本』にしかない。よって、これも「民部卿家歌合」と同様に、本来は無かつたと考えられる。但し、「左」「右」の表記は共に全番にあり、「民部卿家歌合」のように左右の歌が入れ替わっていることは無い。

歌題についても、『十卷本』「款冬花」と『二十卷本』「山ふきの花」など表記の違いはあるが、両本一致している。九番目の「雁靡花」が『二十卷本』には無く、「九番」とあるのみで、最後が「十二番 子日」となっているのは、書写時点での誤脱であろう。

また共に最初の歌題を「子日」とするが、1・2には『続後拾遺集』詞書にあるように、「子日の松」が隠されている。「松」は勿論、『土佐日記』の「二十九日。(中略)正月なれば京の子日のこと言ひ出でて、『小松もがな』と言へど、海中なれば難しかし」や、「子日する野辺に小松の無かりせば千代のためしに何を引かまし」(拾遺集・春・二三・題知らず・忠岑)など

のように、「子日」の行事に不可欠の景物である。しかも、音節数が多いほど物名歌として高度であるにも関わらず「子日」のみであるのは、これが当初の題であったことを示しているのではないか。後で歌から題を導き出したのであれば、「子日の松」とされているはずである。

さて歌題のうち、最初の「子日」と最後の「子日を惜しむ」以外は、十番すべて「花」である。しかも、「春花」「梅花」「紅梅花」「桜花」「樺桜花」「款冬花」「躑躅花」「雁靡花」「石解花」「藤花」と、初春から暮春までの春の花ばかりである。『古今六帖』第六帖では、「款冬」や「雁靡」（ジンチョウゲ科「雁皮」やナデシコ科「岩菲・仙翁花」など諸説あり）、「石解」（ラン科「石斛」）は「草」、その他は皆「木」に属している。このような春季の色々な草木の花のみという題の設定がまず、最初に述べたように、「近江御息所歌合」の手本となったと考えられるのである。

「近江御息所歌合」は、初期前栽合中唯一の春季開催のもので、校訂後の題を示すと、「梅の花」「柳」「花桜」「樺桜*」「棟*」「火桜の花」「庭桜」「梨の花*」「桃の花」「岩躑躅」「梶の木の花」「山萵苣の花」「猿捕の花*」「楓の花*」「山梨の花」「岩柳」「躑躅の花*」「浮草」「山吹の花」「藤の花」である（*は物名歌）。題に「花」が含まれていない場合も、「宮の花といふ歌を合はず」と仮名日記にある通り、歌には必ず含まれている。「柳」「梶」「楓」「浮草」も例外ではない。「若葉青葉の本草」（『歌合大成』）ではなく、「花」をよんでいるのである。

これらの題は、本歌合十題のうち六題「梅花」「桜花」「樺桜花」「款冬花」「躑躅花」「藤花」と一致しており、特に「樺桜」は、11・12と「近江御息所歌合」の「吹かれ来る香には桜ぞ添ひて散る春を送れる匂ひなるべし」（四）の三首以外には、貫之の「潜けども波の中には探られで風吹くごとに浮き沈む玉」（古今集・物名・四二七・樺桜・貫之、古今六帖・六・樺桜・四二一六）しか平安時代の例歌が無い。なお、初夏の花を含む点が本歌合とは異なるが、これには「亭子院歌合」の影響が考えられる。

一方「本院左大臣家歌合」は、初の撰関家主催というだけでなく、庭の色々な草木・草花をよんだ歌合の初例である。従来この題は、「寛平御時菊合」「亭子院女郎花合」「宇多院女郎花合」のように秋季の単一の植物であった。なお、続く「東院前栽合」以降の前栽合では、「露」や「月」、秋の虫などの景物も題に加えられる。本歌合の開催が「本院左大臣家歌合」以前であれば、その開催の契機と考えることもできるが、おそらく後だろう（前節参照）。いずれにしても、主催者や季節は対照的であるが、色々な草木を題とする点が共通することは確かである。また、「本院左大臣家歌合」は、『古今集』では夏歌に入れられた「常夏」の歌で始まり（一）、晩秋に咲く「龍胆」をよんだ「下草の花を見つれば紫に秋さへ深くなりにけるかな」（二〇）で終るといいうように、配列が時間的推移に合致する。本歌合も、題が春季の花の開花順に配列されており、歌の内容も、1が雪解けで、末尾の24には来たるべき夏の虫の「蛩」がよみこまれ

ている。「近江御息所歌合」の歌題順は、例えば「棟」が五首目にあるなど（但し歌の内容は梅の花）、初夏と春の花とが前後するようだが、主たる木の花のみを見ると、「梅」「柳」「桜」が最初にあり、最後が「山吹」「藤」というように、本歌合や『古今集』春歌・夏歌の配列に合致している。また末尾の「藤」の歌が、「梢高し」という歌言葉によって夏の鳥の「郭公」を暗示している点も、本歌合の24に通じるのである。

「民部卿家歌合」の「郭公」題十番について、「時鳥の動静や時鳥に対する心情の、時間的推移が順次詠み込まれる形で、歌合が進行している」こと、そのみならず、「一日という時間の中における夜から朝へという流れで意識している」ことを、井出至氏や徳植俊之氏が指摘されている¹¹³。最古の、かつ一つの題においても、時間的推移に添って歌が合わされていた。春秋の前栽を題とする本歌合や「本院左大臣家歌合」「近江御息所歌合」の構成やよみ方は、その延長線上にあると言える。

また、「近江御息所歌合」中、「躑躅の花」は男の忍ぶ恋、「浮草」は忘れられた女の物思いの歌であり、男と女、恋の始めと終わり、不会恋と会恋という対照的な恋歌の番い（ペア）となっている（一七と一八）。本歌合も、2は「片恋」の「胸の火」をよみ、7・8は「会ひ難き人」と「忘れにし人」、23も「胸の火」をよむ恋歌である。なお24「螢」の「火」は、「夕されば螢よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき」（古今集・恋二・五六二・題知らず・紀友則）のように恋歌によまれるものだが、見立ての面白さを主眼として、あえて非恋歌をよんだ

ものと見ておきたい。

恋はあまりにも一般的な和歌の主題である。しかし、本歌合や「近江御息所歌合」が「花」を題としつつも恋歌を含み持つのは、偶然ではなく、次にも一部示したように、当時の歌合や撰集の題が四季と恋を基本とすることを意識したものではないだろうか。

「在民部卿家歌合」……12番¹¹⁴（郭公10番／不会恋2番）

「寛平御時后宮歌合」……100番（春・夏・秋・冬各20番、計

80番／恋20番）

「寛平御時中宮歌合」……17番（春・夏・冬各3番、秋4番、

計13番／恋4番）

「左兵衛佐定文歌合」……19番（首春・仲春・暮春・首夏・

晩夏・初秋・仲秋・暮秋・晩冬各

1番、計9番／不会恋・会恋各5

番、計10番）

「亭子院歌合」……30番（二月・三月各10番、四月5

番、計25番／恋5番）

このように、少ないもので四季題の番数の五分の一（「在民部卿家歌合」「亭子院歌合」）、多いものは四季題以上の恋の歌の番いがある（「左兵衛佐定文歌合」）。本歌合も、内容的には恋歌が少なくとも四首あり、前者に近い。

なお、「本院左大臣家歌合」では「山橘」や「竹」「常磐木」といった常緑樹（一三・一七・一九）、「近江御息所歌合」では「山吹」や「藤」の花の色の深さ（一九と二〇）によって主催

者賛美がなされていたが、本歌合の「花」の歌には、特に祝意は見出せない。本歌合のそれは、「子日(の松)」「子日を惜しむ」という題に求めることができるだろう。

五、表現の特徴

本歌合の歌の最大の特徴は、勿論すべて物名歌ということである。十二番のうち六番目の「樺桜花」のみ、12「俄かには桜の花と」、13「遙かには桜の花と」というように、完全には隠されてはいない。その他は見事に題とは全く別の事柄をよんでいる。

これに対して「近江御息所歌合」は、全二十首中六首が物名歌で、うち「樺桜」のみが本歌合と同じく「香には桜の」と部分的である(四、前掲)。その他の五首(五・八・一三・一四・一七)も、題そのものからは離れているが、春季の他の花や「鶯」「若菜」など、題の季節の範囲内の花鳥をよむ、という方針がうかがわれる。「本院左大臣家歌合」は、これらとは対照的に物名歌は皆無で、字音語の「紫苑」「竜胆」ですら実景をよんでいる(一八・二〇、二〇は前掲)。

その他の本歌合の歌の表現や内容の特徴としては、まず、各番の二首が、それぞれ優劣を競い合うというのではなく、基本的に右歌が左歌の用語や内容を受けてよまれている、ということが挙げられる。以下、具体的に見ていきたい。

左歌1が「峰の日の先づ」射して春の雪が解けたことをよむと、右歌2は「峰」を「駿河の富士の山」と具体化し、「日」

を「恋(こひ)」の「火」に変えて火山の火と掛け、「胸の火の先づ」燃え増さる、と片恋の歌をよむ。

3は「年変はる野はなほ」変化したらしい、「鹿の子斑に雪も消えけり」とよみ、4は「白雪の消えて緑に変はる野は流れて……」と、同じ語句を繰り返して、「白雪」が完全に消えて「色」が「緑」一色に変わった、3よりも少し先の段階の野原の様子をよむ。「白」と「緑」の対比、一色と3の「斑」の対比もある。

5が「出でて潜きてむ海布の葉靡きて打ち寄せよ波」と願望をよむと、6はそれに「風」を加え、「出でて見む海布の葉靡きて波に寄るや」と、風が吹いたら実際にそうなったのか浦に見に行こうと、やはり一段階先のことをよんでいる。

7が「会ひ難き人を」更に実際に「見し頃は寝の離れては寝られざりけり」と、恋の始めの不眠をよむのとは逆に、8は「忘れにし人を」夢では依然として見ることができ、「来むは寝の華やかに寝られてぞ見る」と、夢にのみ心が花やぐ恋の終わり頃をよむ。

9・10は漢字を当てて試解を示したが理解し難い部分が残っている。左右の歌は無関係のようである。12も下の句が未詳だが、11が春霞を「見て」「俄かには桜の花」と思った、と遠景の桜を霞に見立てたのを受け、そんなふうには「遙かには桜の花と見ゆれども……」と続けているのがわかる。歌い出しの二音「はる」も共通する。

13は「木の葉なる露を玉」のまま「消」さないように花を折

るのを止めておこうとよみ、14は「春雨」がまんべんなく降って「木の葉」が皆「もえ（萌え・燃え）」出したことをよむ。題を隠した「……止まふ木の葉な……」を繰り返しただけではなく、「玉」に見立てられた「露」を「雨」で受けている。また、「消た」と「燃え」の対比もある。

15が「雁が音に思ひかけつつ偲ばなん（偲んでほしい）」というままならぬ恋の思いをよむと、16は「鶯」が「声懐かしく鳴きつるは」姿を隠した後にも自分のことを「恋ひつつ偲ばなむ」ということか、とよむ。要の語句はそのままだが、鳴き声に限らず雁そのものや手紙（雁信）をも表す「雁が音」を、明確に「鶯の声」とし、主情を鶯に対する愛情や惜春の情に変えている。

17は「片岡に火の花々に見えつる」と山焼きの様子をよむが、18は「わたつみの沖中に火の離れ出でて燃ゆと見ゆるは天つ星かも」と、「星」に見立てられる漁火をよみ、同じ燃える「火」であっても、山と海の対になっている。

19は「春」が「昨日」来たばかりなのに、「浅緑」の草が「なべて今朝濃く野は成りにけり」と、「昨日」「今朝」「浅」「濃」の対比をよんでいる。20は「春雨」に花の薬が緩んで「春の草濃く野はなべて咲き満ちにけり」と、同じく「春」と歌い出すが「雨」を付け加えており、草の色が浅緑から濃くなっただけではなく花が咲き満ちるといふ、一層春が深まった段階の野原の様子をよんでいる。つまり、前述した3・4の関係と同様である。

21も「露」を「玉」に見立てて、「見え紛ふ茅の葉ながらに」に題を隠し、22は「月」の歌として「淵の端門」とよみこむ。両歌は一見無関係のようであるが、「光り」「消え」と「照り」「曇り」の対は類似している。

23は「胸の火を緒しも貫かねば」涙の「玉」で消すとよみ、24は我が身ならぬ「螢」の「胸の火を緒しも解け」た「玉」に見立てている。語句は繰り返しながら、主として夏の夜の「螢」の叙景歌に変えており、前述したように、末尾に夏の要素がよみこまれているのは、構成上も看過できない点である。

このように、右歌は左歌をふまえて、次の段階に進めたり、意味を転換したり、対照的な事柄をよんだりしているのである。兼題ではなく、当座即詠ならではの特徴だと言えよう。

「本院左大臣家歌合」においても、左が「露」をよむなら右は「霜」（九と一〇）、「山」なら「川」（一一と一二）などのように、左右が番い（ペア）となることが強く意識され、対抗する勝負するというよりも、対照あるいは対称の妙を楽しんでいた。更に、左右の番いではない「近江御息所歌合」でさえ、二首ずつをペアにする意識が見られるのである（一七と一八、一九と二〇の二組については前節でふれた）。

更に、徳原氏が「民部卿家歌合」について、徳植氏の指摘を継承し、「左右二首を番えつつ進行する周知の形式ではなく、左方と右方が交互に歌を詠み、1に2を、2に3を、3に4をと、次々と歌を合わせながら展開する歌合であった」と推測されているが、本歌合も、「後世の連歌のように歌を合わせつつ

展開する(徳原氏)、「鎖状」「連想的」(徳植氏)ということが、ある程度は指摘できる。

別の番いの歌を受けて後の歌がよまれている最も顕著な例は、3の貫之歌である。3の「鹿の子斑に雪も消にけり」は、1の貫之自身の「雪ぞ解けける」と、2の「駿河の富士の山」を受けている¹⁴。更に、13・14の関係で述べたのと同じく、3の「消にけり」は2の「燃え増さる」との対でもある。この3を受けて4の忠岑歌がよまれたことは前述した。

その他にも、5の貫之歌が、海藻を採ることや、それが波によつて打ち寄せられることをよむのは、4の「流れ」の語からの連想ではないだろうか。また7の貫之歌は、「更に」の語が自身の5の「更に」と共通し、「会ひ難き人」との恋をよむのは5・6の「海布」(海藻のうち食用のもの)や「靡き」と繋がるだろう。9の「朝顔」は恋人の朝起き顔に用いられる語で、7・8が単に恋歌というだけではなく「寝」をよみこむことに直結する。また「いざ」の語も少し前だが6の定文歌にあった。11の貫之歌冒頭「春霞立ち」は10の初句「春は来ぬ」と同義である。

また11の五句「思ひけるかな」は、13定文歌五句「消たじと思へば」、15二句「思ひかけつつ」に受け継がれる。一般的な語ではあるが、本歌合中「思ふ」はこの三首のみである。13・15には、「我ぞ」「我が身」もある(他は9の「我が園」。これらは、左方の中の語句の継承と言えるだろう)。

また、13の「花折らで」の「花」は、「梅」の場合もあるが、

11・12でよまれた「桜の花」の例が多い。

17貫之歌の「火」は、1・2を参照すると、16の「恋ひ」を受けていると考えられ、また17・18の「雁、靡花」という題と15定文歌の「雁が音」との一致も、偶然とは思われない。本歌合中、鳥がよまれるのは15と16だけである。題の順があらかじめ決まっていたのであれば、15は次の番の題を先取りしていたことになるし、題の設定にもある程度の即興性があったのなら、貫之が鳥の名前を含む暮春の花名を探し出したことになる。

さて、19貫之歌と20は共に「春」の「野」の様子をよみ、題材及び二首の関係が、3貫之歌と4忠岑歌に共通することは前述した。この四首は、3雪解けが進み「鹿の子斑」になった↓4「白雪」が消えて「緑」一色になった↓19「浅緑」が「なべて」濃くなった↓20「春雨」が降って緑が濃くなるだけでなく「なべて」花が咲いた、と繋がっている。また19の「野は成りにけり」と全く同じ句は9だが、貫之自身の3の「野は異に成りぬらし」が、その先蹤であった。この二つの番いの関係は、離れているので「連想的」「鎖状」と呼ぶには相応しくないが、特徴の一つとして挙げておきたい。なお、「近江御息所歌合」にも二首の関係の繰り返しが見られる(五・六と一三・一四)。

本歌合中の「春」の「野」の歌は右の四首のみだが、14は「春雨」で「木の葉なべても萌えにけるかな」と近似する内容をよんでいた。そこに19と同じ「なべて」の語も用いられている。

20は、14と「なべて」だけでなく「春雨」も共通する。続く21は、「茅の葉」に置いた「露」を「玉」に見立て、それが「消」

えないことを望む歌であるが、13とは「茅の葉」と「木の葉」の違ひのみで、言葉も内容もほぼ同じである。前述したように、13「露」の「玉」を受けて14「春雨」がよまれていた。20・21は、逆に20が先に14と同じ「春雨」をよんだのを受けて、21が「露」の「玉」をよんでいるのである。

23の貫之歌は、2の「胸の火」と、21の「玉」「消え」を受け、「露」ではなく「涙」をよむ。この歌に限らず、貫之が左方の歌人として、積極的に、一首あるいはそれ以上の歌を踏まえ、てよもうとしていることが、うかがえるのである。

以上、左右の二首の番いとしてのあり方、番いを越えて「連歌的」「鎖状」に繋がっている様、貫之の積極性、主導性を具体的に見てきた。徳原氏が本来「二首（あるいはそれ以上）の歌の対照の妙や調和の妙を味わうのが『歌を合はす』楽しみ」であったと指摘されたが、本歌合も正にその「古い歌合のなごりをとどめる事例」だと言えよう。『歌合大成』に、「方人即歌人という場合を考えるならば、当座即詠という息詰るような場面を想像することも出来る」という指摘があるが、物名の優劣を競うという意味ではなく、その「楽しみ」を実現可能にしている理由として、「当座即詠」という語を用いておきたいと思うのである。

六、おわりに（受容・意義）

本歌合の受容については、三節に示したように、『古今六帖』第六帖・草に、「かにひ」全一首、「さこく」三首中二首として

採られており、編者が珍しい草の花の歌に特に注目していたことがわかる。また、『拾遺集』『拾遺抄』『続後拾遺集』などは、物名歌の取材源としていた。

更に「近江御息所歌合」は、物名だけでなく、前述したような題、その配列、歌どうしの関係の他に、用語においても影響を受けている。

A春立てばいづことも無し野は成りぬ若菜摘むべく成りぞしにける
(近江御息所歌合・八・梨の花)

①秋近う野は成りにけり白露の置ける草葉も色変はりゆく
(古今集・物名・四四〇・桔梗の花・友則)

「野は成りにけり」は①にもあるが、Aとは春秋の違ひがあり、やはり19の「春来ては……野は成りにけり」がAに最も近い。また二句「いづことも」は、14の初句しか前例が無い。ちなみに、五句の「成りぞしにける」も稀な語句だが、「民部卿家歌合」一二番歌や「是貞親王家歌合」一八番歌に見える。歌合間に表現の継承があったことがわかる例の一つである。

B君を思ふ心に見つつ忍ばなむ恋しき折はあまた過ぐれど
(近江御息所歌合・一七・躑躅の花)

②思ひ出づる常盤の山の岩躑躅言はねばこそあれ恋ひしきものを
(古今集・恋一・四九五・題知らず・よみ人知らず)

③秋の夜を雁は鳴きつつ過ぐれども待つ言伝は見ゆる夜も無し
(赤人集・七六)

④会ふことの形見の種を得てしがな人は絶ゆとも見つつ忍

ばむ

(素性集・三三三)

⑤撫子の花咲きにけり我妹子が恋ひしき時のよき形見草

(書陵部本躬恒集・三七二)

Bは、四節でも述べたように、男の忍ぶ恋をよんだ恋歌である。「岩躑躅」が題ではないが、主題は②を踏まえている。語句の前例は③④⑤にも見えるが、更に、本歌合の「躑躅の花」という題は勿論、15・16の語句「思ひかけつつ忍ばなむ」「恋ひつつ忍ばなむとか」を融合させて、「君を思ふ心に(躑躅の花を形見として)見つつ忍ばなむ恋ひしき時は……」とよみ込んでいるのである。先行する歌合や『古今集』の歌の表現を用いるのは、「近江御息所歌合」の歌の特徴の一つであるが、当該歌はその中でも上手く融合させたものと言えるのではないか。

「近江御息所歌合」は、「本院左大臣家歌合」ほど確実ではないが、貫之の参加が推測される歌合である。本歌合を含め、これらの歌合をより詳しく見ていくことで、初期歌合の特徴のみならず、貫之たち当代歌人の試みの多様性が、一層明らかになるだろう。

注

(1) 久曾神昇氏『伝宗尊親王筆歌合巻研究』(尚古会、昭和12)。

以下、氏の説はこれに拠る。本歌合について最も詳しい先行研究である萩谷朴氏の『平安朝歌合大成』巻一(同朋社、昭和32)にも、同様の指摘がある。

(2) 両歌合については、風間書房『歌合・定数歌全釈叢書』

の『初期前栽合』(仮題、共著)の中に注釈と解説を用意している。本稿では具体的な例証は省略し、結論のみを用いた。

(3) 国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルムのコピーに拠る。底本との異同は、1さし―ふし、3・4春花―二字の間に「雪」を書き見せ消チ、7ころ―こい、10まくへき―「もすへき」の「もす」ではなく「すへ」を見せ消チにして右に「まく」、10はなさ―「はさ」と続けてその間に「な」、11みて―見て、13けたしとおもへは―「と」ナシ、14なへて―なへく、14も、えに―も、ひに、16こひつ、―こひて、16しのはなむ―「の」ナシ、19なり―成、20しへ―しつ、20こく―ころ、20なへて―なつく、21みえ―みひ、21まかふ―「まかはふ」の「は」を見せ消チ、22はなとは―「は」欠く、22らむ―らん、23・24を、しむ―「を、しむにて」の「にて」を見せ消チ。

(4) 例えば、「植ゑ立てて君(宇多院)が標結ふ花なれば玉と見えてや露も置くらむ」(後撰集・秋中・二八〇・御返し・伊勢)。

(5) 『二十巻本』については影印本で確認した。『日本名跡叢刊68』(二玄社、昭和57)。「近江御息所歌合」と合冊。

(6) 「我が上に露を置くなる天の川門渡る船の櫂の雫か」(古今集・雑歌上・八六三・題知らず・よみ人知らず)には「月」は無い。「天の川」を「月」が「流」れるとよむのは、

『古今集』八八二、『後撰集』二二〇・三三九・三三〇や、「照る月の流るる見れば天の川出づる水門は海にぞありける」(土佐日記・正月八日条、後撰集・羈旅・一三六三・詞書略・貫之)等。「天の川夜深き淵にこと寄せてしばしやすらへ渡る月影」(田多民治集・二〇二)、「天の川淀む淵あらば久方の夜渡る月をしばし留めよ」(袋草紙・五五八)では、「天の川」「月」「淵」の三つが結びついている。当該歌がその初期の例である。

(7) 「我が宿の花踏みしだく鳥打たん野は無ければやここにしも来る」(古今集・物名・四四二・りうたんの花・友則)は、『友則集』では「……踏み散らす鳥打たう……」(六九・りむだう)となっており、「打たう」で「打たむ」の意としている。また、神作光一氏編『八代集掛詞一覽』(風間書房、平14)によると、「あらう(荒鶺・洗ふ)と見れど黒き鳥かな」(金葉集・七二二)は後代の例だが、「思ひ川絶えず流れるる水のあわ(泡)のうたかた人にあはで消えめや」(後撰集・恋一・五一五・詞略・伊勢)のような例がある。つまり、「ふ」は「う」に通じ、「う」は「梅(うめ・むめ)」のように「む」に通じる。よって、「止まふ」は「止まむ」になる。但し、14は「止まむ」では意味が通らず、また「雨……舞ふ」とも言わないので、「降り止まぬ(ず)」とひとまず解しておく。

(8) 『歌仙家集本伊勢集』の『拾遺集』からの増補部分に見える(『私家集大成 中古I』所収「伊勢集Ⅲ」五〇四番)。

(9) 遠藤寿一氏「宇多院物名歌合の成立」(『湘南文学』23、平1・3)。

(10) 藤本宗利氏「あさがほ考」(『枕草子研究』風間書房、平14)。

(11) 徳原茂実氏「歌合の成立と展開」(和歌文学講座5『王朝の和歌』勉誠社、平5)。以下、氏の論はこれに拠る。

(12) 井出至氏「逐時」的和歌配列法の源流」(『小島憲之博士古稀記念論文集 古典学藻』塙書房、昭57)、徳植俊之氏「在民部卿歌合について」(『平安文学研究』77、昭62・5)。以下、徳植氏の論はこれに拠る。なお氏は、「歌合」という形はとっているが、実際は、歌会的な要素の強い歌合であった」と述べられている。

(13) 萩谷朴氏は『平安朝歌合概説』(私家版、昭44)において、初期歌合の「寛平御時菊合」や「亭子院女郎花歌合」に用いられる「占手」「最手」の名称と共に、本歌合を含めて十二番構成が多いことから、歌合が相撲節会の行事次第を模して成立したと推測された。泉紀子氏も「歌合の成立」(和歌文学論集5『屏風歌と歌合』風間書房、平7)において、「もはや疑いのないところ」と支持されている。

(14) 「時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子斑に雪の降るらむ」(業平集・六六、伊勢物語・九段)。以下、各参考歌・例歌を挙げておく。

5 「満つ潮の流れひる間を会ひがたみみるめの浦によるをこそ待て」(古今集・恋歌三・六六五・題知らず・深養

父)、紅葉葉の流れて落つる網代には白波もまた寄らぬ日ぞ無き」(貫之集・四五四)。

7 「石見の海津の浦をなみ……玉藻沖つ藻 明け来れば波こそ来寄れ 夕されば風こそ来寄れ 波の共か寄りかく寄る 玉藻なす靡き我が寝し 敷栲の妹が手本を……」(万葉集・卷二・相聞・一三八)、「女郎花秋の野風にうち靡き心一つを誰に寄すらむ」(亭子院女郎花合・四・左大臣、古今集・秋歌上・二三〇・詞略・左大臣)、「川の瀬に靡く玉藻のみ隠れて人に知られぬ恋もするかな」(寛平御時后宮歌合・一五六、古今集・恋歌二・五六五・寛平御時后宮歌合の歌・紀友則、友則集・四三)。

9 「しどけなき寝くたれ髪を見せじとやはた隠れたる今朝の朝顔」(小町集・九七)、「白露の急ぎおきたる朝顔の見つとも夢よ人に語るな」(敦忠集・二二)。

13 「誰しかも求めて折りつる春霞立ち隠すらむ山の桜を」(古今集・春歌上・五八・折れる桜をよめる・貫之)、「折り取らば惜しげにもあるか桜花いざ宿借りて散るまでは見む」(同・六五・題知らず・よみ人知らず、是則集・二)他。